80
令和5年10月5日

《創刊80号記念》

明珠

龍泉院参禅会会報

表紙写真
龍泉院住職　明石 直之 師
（撮影：小林 裕次 氏）

『明珠』第八〇号の快挙

龍泉院東堂
椎名 宏雄

何はともあれ、参禅会皆様方の汗の結晶ならぬ参禅の結晶である『明珠』が号を重ねて八〇号というすばらしい数を迎えられました事を心からお慶び申し上げます。

私は現在流山市の某老人ホームに起居しておりますが、ここで衣食住すべてにわたり大勢の従業員さん方のお世話によって生かさせていただいております。ただ『沼南町の宗教文化誌』の第三号になる予定の原稿執筆を中心に、読書や他の執筆、そして大けがを少しでも良くする為のリハビリ運動などを少々ながら行っております。

さて、『明珠』でありますが、あの題名は勿論道元さまの「一顆の明珠」から採り、表紙の文字は私の拙字でありますが、その原字はどこかに保存した筈ですから、もしも探し出せれば大切に保管をと存念します。

『明珠』の意味は、すでに創刊号に書いた通りで少々難解でありますが、要するに私たちがここに生かされている真実のありさま、また生かして下さっている花鳥風月（これは四季を象徴しています）、すべての現われの事を申されているのであります。

その事実を私の若き頃からイヤというほど教えて下さった方が、ほかならぬ澤木興道老師さまであります。

私が駒澤大学に入り、初めて旧坐禅堂の単に坐ったのが偶然にも老師の向い単でありました。それからの一年間はビクビクしながらも老師の一挙手一投足に感化されっ放しでした。短詩のご提唱、短語のご教示に感響の連続という有難い期間でした。

「お前たちから色気と食気を抜いて何が残る。残るものがあればそれだけが本物だ」これは老師の諸書の中に出てくる有名な喝語でありますが、私は直接にこれを大声され、そのたびにギャフンの連続でした。

老師は昭和四〇年暮に満八五歳でご遷化されましたが、駒大にある禅研究館の最上階には新坐禅堂があり、その入り口には老師の等身大の坐相木像が厳として飾られている。厳然として活きておられる。私がこれまでに遭遇した困難の解明は、あの率直簡明で慈訓愛語を発せられた老師が私の体内から直指して下さったものであった。だから私の体内に老師はいつも厳坐しておられるのであります。

私は病院で半歳あまりもお世話になりました。リハビリ病院において、ベテランの理学療法士（ＰＴ・ＰＸ）の方々が常に述べられていた言話を忘れることができません。それは「私たちは患者さんのケガや病いを治療しようとしているのではなく、患者さんご自身が本来持っている力を引き出すための努力を惜しまないだけです」と。これには心打たれ感銘を受けました。この「本来持っている力」こそ道元さまのお示しの「明珠」であり、それを生涯通じて実践明示されたのが澤木老師ではなかったでしょうか。

私たちの『明珠』八〇号は、もうすぐ百号に達します。むろんその時私はこの世にいないでしょう。しかし、もしも右の意思に同調される方がおられるならば、どうか私めの供養にと思って一日だけで結構。本モノの坐禅をして下さい。私はどこかで本モノの破顔大笑をしてこれを喜びますから。

至禱至禱

《特別寄稿》

道元禅師の修行観

―龍泉院参禅会会報誌『明珠』第八〇号発行に寄せて―

智源寺専門僧堂堂長　髙橋　信善

龍泉院様の参禅会が五〇年もの長い期間、参禅修行を続けてこられたこと、またその内容において、他の参禅会などと比較しても比類なきことを考えるとき、拙文を掲載させていただくのは恥ずかしくもあり、会報誌に泥を塗ることになるのではないかと危惧している処です。

しかしながら、明石直之住職の師匠でもあり、龍泉院様に紹介させて頂いたご縁に従い、愧汗も顧みず駄文を寄稿する次第です。

拙衲は曹洞宗の専門僧堂をお預かりしている関係上、一年の内で夏三か月、冬三か月間を修行僧と共に禁足（原則的に外泊禁止）して、より厳しく修行することになっています。この期間を夏安居（げあんご）、冬安居（とうあんご）といいます。その安居期間中に修行僧のトップとして修行僧をけん引していく役目を果たす「首座（しゅそ）」という役を担う修行僧を選びます。その首座が安居期間中に修行僧と問答を戦わす「法戦式（ほっせんしき）」という行事があります。拙衲はその首座へのせめてものお祝いに「賀偈（がげ）」として、慙汗ながら七言絶句の漢詩を作り、墨書して贈ることにいたしております。今夏の祝偈は左記のように作りました。

釋迦文佛涅槃梅
少室承陽鐵漢開
本行拈華白山道
紅蓮微笑密参来

釈迦牟尼仏のニルヴァーナの梅は、達磨様の少室峰にも永平寺の承陽大師の足下でも、或いは我が師翁岸澤惟安老師の鐵漢楼の元にも咲いた。その拈華（ねんげ）の内容は「本行（ほんぎょう）」であり、今夏首座の本師の参学師である白山老古佛の道でもあった。今夏首座の本師である紅蓮山の当主の示すところの微笑（みしょう）を今の首座は親密に参学し修行し来たれ。

あらかたこのような意味合いでありますが、釈迦牟尼仏の梅つまり涅槃は、ここでは釈迦牟尼仏のお悟りの内容は達磨様はじめ代々受け継がれて、白山老古佛では「本行」という拈華として示された。それを受け継がれた首座の本師である紅蓮山の山主が微笑としてまたそこを示しておられるのである。

さてそれではこの「本行」とはどのような意味合いを持つものであろうか。

「大道十成する時、説法十成す、法藏付屬する時、説法付屬す。拈華のとき拈説法あり、傳衣のとき傳説法あり、このゆゑに諸佛諸祖おなじく威音王以前より、説法に奉覲しきたり、諸佛以前より、説法に本行し来たれるなり」（正法眼蔵無情説法）

「しかあれども水をもて身をきよむるに

あらず。佛法によりて、佛法を保任するに、この儀あり、これを洗浄と稱す。佛祖の一身心をしたしく正傳するなり、佛祖の一句子をちかく見聞するなり、佛祖の一光明をあきらかに住持するなり。おほよそ無量無辺の功徳を現成せしむるなり。身心に修行を威儀せしむる、正當恁麼時、すなはち久遠の本行を具足圓成せり。このゆゑに修行の身心本現するなり。」（正法眼蔵洗浄）

「般若波羅蜜多は、是諸法なり、この諸法は空相なり、不生不滅なり、不垢不淨、不増不減なり、この般若波羅蜜多の現成せるは、佛薄伽梵の現成せるなり。問取すべし、參取すべし、供養禮敬する、これ佛薄伽梵に奉覲承事するなり、奉覲承事の佛薄伽梵なり」（正法眼蔵摩訶般若波羅蜜）

と、『正法眼蔵』各巻にお示しであります。

難解なお言葉を並べてしまいましたが、分かりやすく申せば、釈迦牟尼仏も釈迦牟仏以前の仏も、その後の仏も、自らの佛性に奉覲承事し本行しているのだと言うことができます。

奉覲承事（或いは、ぶごんじょうじ）、お仕えすることです。本行も本来の行という意味でしょうか。

これだけでは木で鼻をくくったようなことになりますので、最近見聞した事柄を引用させて頂き、分かりやすく説明させて頂きます。

先日、存じ上げているお方でしたが、九三歳になられる男性の方より突然お電話がありました。その内容は、関西でお暮しでしたが、偉くなったご子息の関係で、亡くなられた奥様のお葬式を東京で行ったとのことでした。

奥様は大阪で八年間ほど病床にあり、その八年間、ご子息の奥様が一週間に数日、新幹線に乗り大阪まで看病にかよわれ、その間、その偉くなったご子息は独りで料理して、東京の家から仕事に出かけたとのことでした。電話口からはご子息とお嫁さんへの感謝の言葉が、九三歳とは思えぬほど弾んで明るいものでした。

このご家族ではお孫さんも含めて、事あるごとに写経をして、年忌法要の時などに、菩提寺に束になるほどの枚数を納経していたそうです。本当の教育とはこのような家庭教育を言うのではないでしょうか。

「奉覲承事」「本行」というといかにもいかめしく、お仕えするというと儒教のような感覚に捉われますが、九三歳になられる老爺がご子息をそしてお嫁さんを褒めたたえ、偉くなったご子息もお嫁さんも老親に看護の誠を尽くし、孫たちも自分の「本行」を磨き上げている。家族の中でお互いに仕えあい、自分の仏心にお仕えしているお姿が浮かび上がってまいります。

道元禅師様が言われる「奉覲承事」「本行」と全く一緒にしてはいけないのかもしれませんが、より自身の佛性にお仕えしているお姿と拝察いたしました。

また、龍泉院様で「自未得度先度他」を参禅会の標榜に掲げられて活動なされていると拝読し、奉覲承事（他人に仕えること）が「無我」の修行であり、自己の佛性を開発していく「本行」のお勤めと拝受いたしました。

「参禅会五〇周年記念行事（一）第五回『在家得度式』報告＊の中で、杉浦上太郎氏は◆五〇周年は〝錦の織物〟と題されまして、長くなりますが次のような御文章を上梓されておられます。

「龍泉院参禅会」は、昭和四六年五月二五日、

三七歳の椎名老師が八名の方と坐られたことに端を発します。

その中に初代代表幹事の髙間利介さんがおられました。平成二年からは病気入院された髙間氏に代わって小畑節朗氏が同役を引き継がれました。

「入退会自由、会則なし」という極めて門戸の広い自由性がありながら、厳粛な規律性も併せ持つという不思議さが当参禅会の会風であります。まさに『サンガ』といえるでしょう。

参禅会五〇周年の偉業達成の源泉は、比類のない椎名老師の指導力はもとより、お二人の代表幹事の献身的な支えがあったればこそだと思います。

いわば、参禅会は椎名老師と代表幹事が強く太い縦糸となり、歴代参禅会員が横糸となって織り上げた尊い織物のよう思われます。

と、このように「自未得度先度他」の「奉覲承事」と「本行」のお姿を感動的に述べておられます。

それはまた、石井修道先生が「洞山禅師の千百五十回遠忌に想う」＊＊の中で述べられている「曹洞禅は納まり返らない禅であり、道元禅師も「八九成」ということばを使われていますが、十という完成された姿ではなく、十をも超えた動的なところに価値を見出すのが曹洞宗の特徴である」とのお言葉にも通ずるものではないかと思うのです。

自分の「本行」にお仕えするということは、まさに際限のない修行であります。ここの処を道元禅師様は「八九成（はっくじょう）」と申されたのではないかと思っています。

椎名老師も「寺の基本は修行であり、（中略）何よりも「行」と「実践」が重んじられ、生活の中に清規を活かして行くことを強調することこそ、曹洞禅の存在理由がある」と締め括っておられます。＊＊

本当に、龍泉院様の参禅会も檀家様も、稀有と申し上げてもいい仏縁に恵まれていると申せます。

しかし、個人の自由・利益を最優先とする社会風潮が蔓延している現代社会では、「自未得度先度他」「奉覲承事」「本行」という生き方は極めて理解されにくい価値観だと思うのです。

会報誌『明珠』の中で、龍泉院様においてさえ、幹事・会計のなり手が減り、「現在、参禅会は例会への参加者が、減少」している状況が報告されています。龍泉院様は先進的な参禅会を運営されるがゆえに、抱えなければならない難問でもあると思うのです。

「参禅会のあり方の検討」の中で、小畑代表幹事様が「五〇年でこれまでの参禅会は終わった。これからはゼロから出発し、次の五〇年に向かってのスタートにしたい。それを若い人にお願いしたい」と述べておられます。

龍泉院参禅会の益々の隆昌を祈ると共に、同参禅会が、個人主義に糜爛（びらん）した日本社会に風穴を開けることを切に願って駄文を終わります。

合掌

●引用資料／『明珠』79号

＊3P上段　◆五〇周年は〝錦の織物〟の項全文
＊＊13P下段　11～16行目
＊＊＊11P下段　2～11行目

本堂

曹洞宗 専門僧堂
松渓山 智源寺
〒626-0027
京都府宮津市京街道769
TEL/FAX 0772-22-2504
https://www.chigenji.com

＝祝『明珠』発刊八〇号＝

「初心忘るべからず」を信条に、皆様とともに

龍泉院住職
明石 直之

椎名東堂老師及び参禅会会員各位の長年の努力の結実が、『明珠』八〇号の発刊となったことを思い敬意を表するものであります。

早いもので、龍泉院の住職を拝命して今年で三年目となります。そのような中、昔僧侶になる前の職にあった時に聞かされた次の言葉を思い浮かべます。それは、新天地への転勤、あるいは同一の職場での配置換え等があった際、大抵の上司からいただく言葉で、それは、「まず三日、次に三週間、それからも三ケ月と、徐々に職場に慣れていきなさい。そして三年もすれば後輩を指導、監督し、そこから先は次にステップだ」というものです。

この言葉は、住職三年目を迎えた私にとって、次のステップに進むためのあり方について、深く考えさせられる契機になりました。

そこで、今までを振り返り、これからの自分を見つめ直すうえで大変参考になる言葉でありますので、今回はそれをもとに記させていただきたいと思います。それは誰もが知っている『初心忘るべからず』という言葉です。これは室町時代の能楽師、世阿弥の言葉です。世阿弥は「能」を大成した能楽師として数々の謡曲を作成した他、優れた能楽論（演劇論）も残しています。代表的な作品に『風姿花伝』がありますが、この「初心忘るべからず」の言葉は『花鏡』という作品のなかにある言葉になります。さて、この初心忘るべからずという言葉ですが、この言葉には続きがあります。原文を借りて記しますと、それは、

是非の初心忘るべからず。
時々の初心忘るべからず。
老後の初心忘るべからず。

【現代語訳】

①出来の良し悪しに関係なく、修行を始めたころの初心を忘れてはならない。
②修行の各段階における、それぞれの時期の初心を忘れてはならない。
③老いても、老境に入った初心を忘れてはならない。というもので、

この言葉から、人生にはいくつもの「初心」があるということがわかります。それは、ザックリいうと、①修行を始めた時、②様々な経験を積んで自信をつけた時、③年老いて功成り名遂げた時、というふうに区分することができると思います。この言葉を味わうまでは、初心というと「始めた時の純粋な心に戻ってという意味に捉えていましたが、決してそうではないということがわかります。ここでいう世阿弥の初心とは「事に臨むうえでの覚悟」「壁にぶち当たった際の心構え」「その時々のチャレンジ精神」をいっているように思えてなりません。ですので、これからも、それぞれの時期、場面における初心を忘れずに、自己の修養及び檀務並びに参禅会を通じた教化活動に取り組んでいきたいと思っています。

今後と引き続き宜しくお願いいたします。

八〇号を迎えた『明珠』

龍泉院参禅会
代表幹事
小畑 節朗

昭和六〇年四月八日、釈尊降誕〝花まつり〟の日『明珠』は創刊されました。

当時、新本堂の落慶とともに参加者が増加、前年の第二回「成道会」の参加者は三〇名を数えるに至りました。

椎名堂頭老師より「入会自由、退会自由」と言う会の方針から会員同士の交流は希薄なことは良く分かるが、お互いのコミュニケーションの場を作っては如何か、と言う助言を頂き、会報を創ることとなりました。

高野千代さん(故人)と私で編集することになり、全く素人の二人で創刊号は誕生しました。

手探りでの編集、幼稚なもので、出来栄えは七九号の岡本さん、八〇号の杉浦さんの編集とは幼児と大学生ほどの差があり、未熟なことは歴然としております。

ただ椎名老師の巻頭言は五〇年余継続した当参禅会の骨格ともいえるものです。

「正法眼蔵」には、唐代の禅匠、玄沙師備の言葉、「尽十方世界一顆明珠」を拈提した「一顆明珠」の巻があり、尽十方世界が仏性一元の世界であり、自己本来の真実のすがたであることを示されている。

尽十方世界、すなわち、あらゆる世界は絶対真実のすがたであり、われわれにとっては、この与えられた現実を、徹底して強く正しく生きぬくことが、仏法の修行である。そして、坐禅こそは、この尽十方世界の行そのものであり、十方世界を坐断した無心のすがたに外ならない。

ここに、わが龍泉院参禅会の会誌を発刊するに当たり「明珠」と名ずけるゆえんがある。ねがわくは、その名を汚すことなく、自己本来の真実相に直参直入して、宝珠をしてますます明光あらしめんことを。

長い引用になりましたが、堂頭老師は一貫して、この方針で、わが「龍泉院参禅会」を五〇年余、導いてこられました。

その、証左の一つに、龍泉院参禅会は、コロナパンデミック以前、参禅会を休んだことは一回も有りません。これは老師のご指導と、会員相互の乳水和合の賜です。

佛道は、お釈迦様以来二千五百年余りも継続しえたのは「僧」を三宝＜佛法僧＞の一つとして、大切にしてきたからに外なりません。

私は参禅会を佛道において最も大切な三宝の「僧」だと思っております。「僧」すなわち「サンガ」であります。

会員の松井さんが言われるように参禅会は〝新しいサンガの創設を目指さなければならぬ〟と。全くその通りです。

龍泉院参禅会は、創設五二年を経て次の新しい時代に入りました。目指すところは、新しい時代の新しい「サンガ」の創設です。その乳水和合の生き生きした「サンガ」の活動記録が『明珠』となるのではないでしょうか。参禅会として、参禅者として振り返り、また進む道を確認するための鏡が『明珠』です。

高齢化と言われますが、私はそうは思いません。ご覧ください、自由参禅には新しい参禅者が増えています。百人中に一人でも長く続ける方がおられれば大丈夫です。

〝汾陽はわずかに二、三人、薬山は十衆に満ず〟

その一個半個の仏道修行により仏法は今日に伝わった、と道元禅師は言っておられます。

私もそう信じております。　合掌

一日接心

我孫子市　吉澤　誠

六月四日に開催された一日接心に参加いたし、初めて行茶を体験することとなりました。

年番幹事の佐藤様から、行茶の給仕を手伝うよう依頼があり、お引き受けしました。

一日接心は全部で四炷行いますが，行茶は午後の三炷目直後とのことなので、中食後の休憩時間に茶器等の準備等をいたしました。文殊菩薩様そして明石方丈様にお出しする茶器、そして懐紙の折り方などの作法は小畑代表から御指導をいただきました。

三炷の開始前に坐禅堂へ茶器等を持ち込み本番に備えます。そして三炷終了後、給仕の開始です。お茶を注ぐ際、こぼして神聖な坐禅堂を汚さないよう多少の緊張はしましたが、他の給仕役の方々と協力して何とか対処できたと思います。給仕終了後、私も自分の単で行茶を喫しました。

修行僧の方は、坐禅堂で食事・就寝を行うとは聞いておりますが、神聖な場所である坐禅堂で飲食するのは若干の畏れ多さとともに新鮮さを感じました。

今一日接心は小畑代表の貴重な講演を聞くこともでき、大変有意義な一日となりました。

配役担当

柏市　石澤　健

六月四日、一日参禅会に参加させていただいた。午前、午後併せて四炷の坐禅。二炷目と四炷目の後半に普勧坐禅儀の読誦や午前、午後に小畑代表の講演、五観の偈（げ）を唱えての昼食、三炷目に行茶、休憩時間に筍堀り以来の裏山散策など有意義な一日を過ごさせていただきました。

小畑代表、二三歳の時永平寺名古屋別院にて参禅開始、二六歳から三〇歳まで札幌中央寺で後の永平寺貫主となられる秦慧玉禅師指導の下月四回上山、旭川で参禅後三八歳の時龍泉院参禅会に縁を持たれ今日に至るとのこと。現代禅関係で活躍されておられる藤田一照老師の著書にも師匠の師匠として良く出てくる内山興生老師には四七歳から六二歳迄一五年間八〇回程面会され教えを乞うとの豊富な経験に感銘いたしました。

行茶では浄人役を依頼され、若し神聖な坐禅堂内でお茶を溢したりしてはと緊張しましたが無事終えることができ自身も添菜と共に美味しくいただくことができました。坐禅の時浄縁にはふれないで座るよう指導を受けますが身を持って納得することができました。

体験記

柏市　齋藤　正好

令和五年六月四日に催された一日接心の折に直堂を仰せつかった。次回以降に一日接心の直堂を担当される方の参考になればと思い、その折の経験を二つだけ書き留める。曹洞宗は不立文字といわれるが、日常的に発生する事象ではないので、明石方丈様にはお許しをいただきたい。

二炷目の終わりに普勧坐禅儀の前半を誦読した。方丈様のご希望は詠み終えたと同時に放禅鐘を鳴らすこと。ところが前半の終わりがわからず、気が付いたら読み終わってしまっていた。慌てて単から飛び降りたが時すでに遅し。次に直堂を担当される方には、前もって方丈様に前半の終了部分に付箋をつけていただくことをお勧めする。

今回は三炷目の終了後に行茶を行った。前もって小畑代表幹事のご説明をいただき、数人で手分けして、各々の席にお菓子を置く紙、湯飲み、お菓子を配り、その後にお茶を注いで回った。ここで方丈様から、配るときは奥の席から配ることとご指導いただいた。

ただの一日ですが良い経験を積むことができた。

心なごむ「一日接心」円成す

六月四日

◎気候やコロナ禍改善に恵まれて―

一日接心の当日は、これ以上望みようがないほどの天空いっぱいの青空となりました。

一昨日の台風二号が、すべての不浄や邪悪なもの、また一般的な感染症疾患と同等となったコロナだが、いささか残る不安感までも一切洗い流し吹き飛ばしてくれたような…。

定刻の八時二〇分、明石住職様の「これより一日接心の開始―」の宣言でスタートが切られました。参加者は住職様以下一七名です。

換気用窓から、時おり吹き込むそよ風が実に心地よい。

一炷―経行―二炷が粛々と終わり、第一段階終了です。

大悲殿に移動し、今回、佐藤年番幹事さんの特別な計らいによって、小畑代表幹事様の講演が実現しました。午前と午後の二回に分けて二時間の講演です。まさに昨年実施された「参禅会発足五〇周年記念行事」の第二弾ともいうべき企画でありました。（内容は別掲）

◎粛々と「行茶」を厳修する！

記念写真撮影の後中食。弁当に、松井典座さんがありがたくも筍・しいたけ・ニンジンの煮物を添えてくださいました（美味！）。

三炷後は、「行茶」の時間です。単のフチの浄縁は、普段は絶対に手足で触れてはいけない神聖な場所ですが、「喫飯」と「喫茶」の時だけは例外とされています。山桐・石澤・吉澤の三氏がテキパキと浄縁を拭き浄め、懐紙、菓子、茶椀を配し、給茶をしていく様は、まさに立派な浄人になりきっていて素晴らしい。

次に小畑代表幹事様の二回目の講演です。たんたんと話される姿に感銘深く拝聴。

いよいよ最後の四炷。やがて放禅鐘が鳴り、明石住職様より「一日接心の終了」が宣せられて無事円成となりました。

◎和やかな雰囲気の中での茶話会！

佐藤年番幹事さんの司会のもとに「茶話会」が進行されました。先ずは四炷を坐り終えた参加者の感想が、一人ずつ述べられました。

市川　信彦　各内容のインターバルが長く、思ったより楽に対応することができた。

市川　洋介　体調を整えてきたので四炷とも楽に坐れた。全ての方に感謝している。

河本　健治　いつもとの違いは椎名老師がいらっしゃらないこと。この日が待ち遠しかった。すべてに感謝する。

中嶌　宏誠　小畑代表の長年の坐禅活動の話しが大変よかった。私はかねてより、近隣の自治会館で坐禅会を主宰している。

坂牧　郁子　さわやかな空気の中、気持ちよく坐れた。年番幹事の丁寧な対応に感謝する。

松　井　隆　今日のために筍を煮た。これは龍泉院様の真竹である。私は作務が生きがい。

山桐　照夫　年番幹事に感謝。小畑代表が長く参禅会をリード。お陰でよい体験ができた。

小畑　二郎　年番幹事に感謝する。小畑代表の話しに感銘を受ける。今後も参禅会の縁を大事にしていきたい

岡本　匡房　『明珠』の編集から解放されたのでゆったり坐禅ができた。

石澤　健　今回で三回目。まだまだ未熟者だが、これからも精進していきたい。

中島　久　一炷目は足が痛かったので、数をかぞえながら坐った。あとは順調だった。

吉澤　誠　坐禅堂の中で飲食をするのは初めての経験。貴重な体験ができた。

杉浦上太郎　佐藤年番幹事を中心に若手の方々が活躍くださって嬉しく思った。

小畑　節朗　久しぶりに坐禅堂にて「行茶」を行った。共に同じものを食し、同じものを飲むというのは大事なことである。これからも長く続けることを願う。（菓子は同氏添菜）

齋藤　正好　佐藤さんのリードで役務を担った。今日は直堂を担当したが、雑念を払うことに努力し懸命に務めた。

佐藤　修平　四炷とも気持ちよく坐れた。小畑代表の話は、今聞いておかなくてはとの思いから依頼した。小畑代表とは深い縁がある。

明石　住職　小畑代表の講演会は素晴らしかった。「行茶」など普段やっていないことをやれたのは、幹事さん達の準備のお蔭だと思う。今日のようなことに参加し、「同事」の功徳を得られるのは選ばれた人だけともいえる。

心に沁みる小畑代表幹事様の講演のお蔭さまで〝心なごむ〟一日接心となりました。

小畑代表幹事「講演概要」

以下一日接心における講義概要を記します。

龍泉院参禅会は昭和四六年七月二五日に発足しました。当初は旧本堂での坐禅でしたが、冬は非常に寒かったものです。

名称を参禅会とした理由を椎名東堂は明確に示しておりませんが、坐禅だけでなく、作務、典座、提唱、機関紙発行などの活動も含めた意図があったようです。

明珠は昭和六〇年に第一号を発行。釈尊の誕生月である四月、達磨大師が亡くなった一〇月を発行月としました。印刷費のため志納金を募ることになり、現在に至っております。

接心は当初、他の寺院で泊りがけで行っていました。大悲殿の完成後は龍泉院で行うようになり、これが一夜接心、現在の一日接心へと変遷しております。

聖僧様も当初は紙に書いたものを位牌に貼り、本堂の中心に据えて坐禅をしておりました。後に皆様から御喜捨をいただき作製。平成二年一二月の成道会での開眼となりました。

坐禅堂は参禅会四〇周年事業として建設しました。皆様の御協力のおかげであり、本当に感謝しております。

仏教との出会いは、進学した旭川東高校に、インド哲学の資料を副読本として生徒に配布した教諭がいたことから仏教に興味を持ち、関連する本を読むようになりました。

卒業後に北陸銀行に入社、日々銀行業務に励んでおりましたが、二五歳の時に名古屋支店へ転勤、そこで加藤黙道老師と出会い、正法眼蔵の読み方等について御教示いただき、その後昭和三三年に札幌支店へ転勤、中央寺で坐禅を行うようになりました。

参禅会はお寺があってのものです。僧侶は法を伝える役割があり、在家とは異なるということを注意して活動してきました。

足腰が弱り一昨年頃から椅子坐禅です。死ぬまで坐禅は難しいですが、寝ても坐禅はできるので工夫次第でないかと考えております。

ますます明光あらん『明珠』

特集記事

◎『明珠』発刊八〇号は偉業！

昭和六〇年に創刊なった本誌ですが、三九年目を迎える本年、いよいよ八〇号の発刊となりました。年二回の発行ですが、平成の一三年と一九年は三回の発行でしたので、三九年間で八〇回の発行という訳であります。

どの号を見ても、すべて全力投球で作成していることが分かります。

初代編集委員は、小畑節朗代表幹事と高野千代子（故人）さん。以来、本年四月発行の七九号まで、五代一九名の編集委員が職責を担って来られました。新たに八〇号の編集から六代目三人が担うこととなりました。

◎『明珠』はまさに参禅会の宝蔵！

毎回、本誌の表紙を飾るのは、椎名老師ご執筆による「従容録に学ぶ」です。七八号までで、七〇回お示しいただいております。難しい「則」を老師特有の平易な言葉で、分かりやすく解説くださる受益は、まさに龍泉院参禅会会員冥利につきるのではないでしょうか。

次に本誌の特徴は、活発な参禅会活動が克明に掲載されていることでありましょう。会発足と本誌発刊の節目の年には、「禅を聞く会」「数次にわたる訪中団」「各地巡拝の旅」「数次の在家得度式」等々。豊富な写真の使用も分かりやすい。会員による投稿記事も魅力です。過去一五〇名以上の方が投稿されました。損得抜きのサンガの世界ならではの本音の記事は感銘深いものが多いです。

また、『明珠』を通読いたしますと、参禅会の歴史のすべてが分かります。左記は例です。

・「第一回一泊参禅会」（昭63年・第8号）
・「年番幹事制」始まる（平3年・第13号）
・坐禅堂建立記念号（平25年・第59号）

本誌10・11頁の『明珠』で見る参禅会のあゆみ」をご参照ください。参禅会の節目ふしめの出来事が一目瞭然です。

◎『明珠』を生かしてこそ〝明珠〟！

殆どの記事が、再度熟読玩味したい内容のものばかりです。合冊本をお持ちでない方も、参禅会ホーム・ページを利用すれば簡単に閲覧できます。〝温故知新〟鋭意のご活用を！

『明珠』と命名された椎名老師のお詞
（『明珠』創刊号一頁より全文抜粋）

〝明珠〟とは、真如・仏性・法性・本来面目、などのたとえである。すなわち、真如・仏性・法性・本来面目などは、この世界における真実のすがたであり、常に円満で無欠無余、表も裏もなく、不二平等、内外玲瓏、キラリと光っている当体そのものである。したがって、これを明珠にたとえる。

『正法眼蔵』には、唐代の禅匠、玄沙師備の言葉、「尽十方世界一顆明珠」を拈提した「一顆明珠」の巻があり、尽十方世界が仏性一元の世界であり、自己本来の真実のすがたであることを示されている。

尽十方世界、すなわち、あらゆる世界は絶対真実のすがたであり、われわれにとっては、この与えられた現実を、徹底して強く正しく生きぬくことが、仏法の修行である。そして、坐禅こそは、この十方世界の行そのものであり、十方世界を坐断した無心のすがたにほかならない。

ここに、わが龍泉院参禅会の会報を発刊するに当り、いみじくも、「明珠」と名づけるゆえんがある。ねがわくは、その名を汚すことなく、自己本来の真実相に直参直入して、宝珠をしてますます明光あらしめんことを。

龍泉院守塔　椎名宏雄　合掌

「明珠」歴代編集委員（敬称略）

	氏名／号数	小畑節朗	高野千代子	杉浦上太郎	武田博志	牧野洋子	今泉房子	久光守之	五十嵐嗣郎	松井隆	添田昌弘	岡本匡房	山本聡	河本健治	坂牧郁子	近江礼子	市川洋介	佐藤修平	吉澤誠
初代 2名	1～14	■	■																
二代 1名	15～24			■															
三代 4名	25～31				■	■													
	32・33				■	■	■	■											
	34～36				■	■	■												
	37～40				■		■												
	41				■		■		■										
	42				■		■		■	■	■								
四代 3名	43～60								■	■	■								
五代 8名	61・62											■	■						
	63～66											■	■	■					
	67～69											■	■		■				
	70・71											■			■	■			
	72～74											■			■	■	■	■	
	75・76											■			■		■	■	
	77											■			■			■	
	78・79											■			■			■	■
六代 3名	80～			■					■										■

龍泉院参禅会のホームページで『明珠』を閲覧する方法は、こうしてー

①龍泉院参禅会名でWeb検索する。

龍泉院参禅会

②“龍泉院-ホーム”の表記がある。

龍泉院-ホーム

③上記をクリックして、龍泉院のホームページに入り、画面上部の右端のメニューから「参禅会」を選択してクリックする。

曹洞宗 天徳山龍泉院 ホーム 龍泉院 参禅会

④右のような細かいメニューが表示される。最下段の「明珠pdf」をクリックする。

- 東堂老師挨拶
- 代表幹事挨拶
- 定例参禅会・自由参禅
- 参禅会年間行事
- 参禅会へのお問い合せ
- 参禅会だより
- 口宣pdf
- 口宣音声
- 明珠pdf

⑤全号がリストアップされている。最上段が最新号。希望の号をクリックするとすぐ閲覧できる。

⑥目的をもって閲覧したい場合は80号別冊「目録・索引」をご利用ください。

◎編集委員はまさに〝作務行（さむぎょう）〟！

昭和六〇年の創刊号以来、七九号（五〇周年記念行事特集号）まで、上表にお示しするとおり、五代・一八名の方々によって、営々と引き継がれてきました。

・初代／七年間・一～一四号（全一四号）
・二代／五年間・一五～二四号（全一〇号）
・三代／九年間・二五～四二号（全一八号）
・四代／九年間・四三～六〇号（全一八号）
・五代／一〇年間・六一～七九号（全一九号）

『明珠』編集委員の特徴は、担当期間が長いことです。最短で五年間、最長はなんと五代の一〇年間です。しかも五代は編集に係った方が最多の八名と最も多い人数でした。これは編集長の岡本さんの卓抜したリーダーシップに負う所大というべきことでありましょう。

もう一つの特徴は、一度編集に携わった方の再登場はないということです。が、奇しくも今六代の三名は全員再登場ということです。これは新たな希望者が出ないためでもあるが、我ら三名〝編集作務の権化ならん〟と決意す。

椎名老師が創刊号でご垂示の「その名を汚すことなく、（中略）ますます明光あらしめんことを。」を、全員肝に銘じたい。（杉浦）

『明珠』で見る 参禅会のあゆみ

昭和六〇年四月の創刊以来、粛々とあゆみ続けて来た『明珠』です。左記に『明珠』の年表を示します。参禅会の〝節ぶし〟の出来事がよく分かるでしょう。更に『明珠』を明珠たらしめたいと願います。

＊東葛坐禅クラブ：より広く坐禅普及活動を行うための組織名

発行ナンバー

年	発行ナンバー	内容
昭33		●椎名老師龍泉院住職就任
昭46		●坐禅指導開始
昭58		●龍泉院参禅会発足
昭60	創2	●第一回成道会実施
昭60	創2	参禅会会報『明珠』創刊（誌の命名と揮毫は椎名老師）
昭60	創2	「従容録に学ぶ」の掲載始まる
昭61	3 4	「第一回一泊参禅会」始まる
昭62	5 6	迦葉山龍華院弥勒寺にて実施
昭63	7 8	◇好評だった連載投稿◇ ①「作 刀 と 禅」森岡 俊雄氏（一～四号） ②「インド旅行記」武田 博志氏（五～七号） ③「二祖慧可大師の耳」小畑 節朗氏（一九・二一・二二号）
平1	9 10	
平2	11 12	
平3	13 14	13「聖僧文殊大士開眼法要」（於：第八回成道会） ・仏師萩原清光師 寄稿「仏像を造る心」
平15	38 39	40 創刊二〇周年記念号
平16	40 41	41「中国仏跡参拝の旅」実施
平17	42 43	42 初の「歳末助け合い托鉢」活動実施
平18	44 45	44『明珠』の本文の文字を大きくする 45 山門改修落慶・開山四五〇回忌
平19	46 47 48	46 参禅会三五周年記念号 ・大乗寺東隆眞老師の禅風にまみえる
平20	49 50	48「降誕会」始まる 49「涅槃会」始まる 50 創刊五〇号記念号 ・特別寄稿 佐々木宏幹先生
平21	51 52	52 ・龍泉院ウエブサイト公開される 奉仕作務記録（作務活動始まる）
平22	53 54	53「良寛さんと出逢う旅」実施 ・旅館で坐禅堂建設を決議する
平23	55 56	56 参禅会四〇周年記念号 ・「眼蔵会」椎名老師 ・「記念講演会」池田魯参先生
平24	57 58	57「第三回在家得度式」

坐禅指導中の椎名老師

作刀作業中の森岡刀匠

文殊菩薩像の原図（萩原師）

晩年良寛様が住んだ五合庵

落慶なった坐禅堂

平4

15・「年番幹事制」開始（平二年より）（初代：三町勲氏・添田昌弘氏）

15 参禅会二〇周年記念号
・「禅を聞く会」鎌田茂雄先生、佐藤俊明老師、木村誠治老師
・「第一回在家得度式」

16・「観音堂」落慶
・「施餓鬼会」作務奉仕始まる

観音堂内の会友

平5

17・18

平6

19・20

平7

21・22

21 「阪神・淡路大震災」
・今泉房子氏・椎名宏智氏
ボランティア活動実践

平8

23・24

24 参禅会二五周年記念号
・「中国五山巡礼の旅」

平9

25・26

25 参禅会二五周年記念号
・「禅を聞く会」実施
板橋興宗老師
奈良康明先生

奈良先生

板橋老師

平10

27・28

28 第二次訪中特集

平11

29・30

29 松井典座デビュー
・「口宣」冊子になる

30 創刊一五周年記念号

松井典座

平12

31・32

平13

33・34・35

34 「仏教東漸の旅」実施

35 参禅会三〇周年記念号
・「北陸地方祖蹟参拝研修の旅」
・「第二回在家得度式」

宝慶寺坐禅堂

平14

36・37

20 創刊一〇周年記念号

平25

59・60

59 「坐禅堂建立」記念号

60 創刊六〇号記念号

61 中国祖庭巡拝の旅

62 「坐禅普及委員会」活動開始

64 「＊東葛坐禅クラブ」誕生

65 「東葛坐禅クラブ」単独による初の「歳末助け合い托鉢」実施

歳末助け合い托鉢

平26

61・62

平27

63・64

平28

65・66

66 「第四回在家得度式」

平29

67・68

67 参禅会四五周年記念号
・「寺宝展」
・「講演会」
田上太秀先生・塩澤寛樹先生

寺宝展で説明する椎名老師

平30

69・70

70 創刊七〇号記念号
椎名老師が引退を表明
・大悲殿をすべて椅子席とする

71 次期住職候補として明石直之（あかしじきし）師を発表
・一夜接心改め一日接心に

令1

71・72

令2

73・74

令3

75・76

75 明石新住職が抱負を述べる

明石住職

令4

77・78

77 疫病除けの版木発見（お札配布）

令5

79・80

79 参禅会五〇周年記念号
・「第五回在家得度式」
・「洞山禅師千百五十回遠忌」法要
・「対談」石井修道先生・椎名老師

80 創刊八〇号記念号

対談中の石井先生（左）と椎名老師

特別企画 アンケート

『明珠』は〈サンガ〉のきずな

幾多の会員が集いまた去った。当参禅会サンガの絆を偲ぶよすがは『明珠』のみ。記念号に因み、『明珠』に対する皆様の思いを集め、今後の誌面作りに資したい。

質問 ❶『明珠』に対する思いは？ ❷最も記憶に残る記事は？ ❸今後についての提言は？

※サンガ（僧伽）：道心に基づいた参禅会内のコミュニティ

（投稿順掲載）

◆ 柏市　坂牧　郁子

❶半年間の行事、ひとつ一つの積み重ねを思い出す事ができます。積み重ねる歴史の証人と思っています。

❷七八号、想うことの「老いの最後」小畑節朗さんの記事。人生の先輩であり、長年代表幹事を務めてこられた小畑さんの晩年の心の収め所に感じ入っています。

❸「想うこと」のコーナーの充実・発表を望んでいます。人生いろいろ、考え方もいろいろ、身近な方の人生の処し方を学びたいと思います。

◆ 柏市　岡本　匡房

❶かなり長い間編集していたので、愛着がわき、感謝するとともに、多くの方と親しくなれたのが最大の財産になった。

❷清水さんの毎回の原稿。特に七九号の大病後の原稿には感慨深かった。御老師の「絆」も考えさせられた。

❸執筆しないとなかなか読まない。広く執筆者を募っては。また、経費面で継続が難しくなる懸念もある。印刷せずホームページで掲載、それを印刷して会員だけに配れば一万円程度で済む。会員減少で収入が減っている現在、検討の余地があるのでは。

◆ 白井市　佐藤　修平

❶四〇年の歴史。編集者・投稿者へ最大限の敬意を表します。

❷記憶に残るのは、異色の「松井・ＮＹの魅力」六〇号（二〇一三年一〇月）。仏教関連の珠玉の文章が並ぶ中、青空に白球飛ぶの感。鈴木さんは、計七回もＮＹへ。後年、東京ドームで週末のデーゲームを楽しんでおられた。

❸坐禅会参加者減に伴い、書き手も読者も減少。無理せずが肝要。年一回発行、紙からＨＰへ、部数削減、合冊中止等の検討が必要と愚考します。

◆ 我孫子市　吉澤　誠

❶明珠の記事を通して参禅会員の皆様の人となりに触れることができるのが楽しみです。

❷明珠七八号の杉浦さんの記事です。杉浦さんの人生における歩み、そして参禅会の門をたたく経緯などが印象に残っております。

❸参禅会員の高齢化・減少に伴い、現在の内容を維持することは難しいと感じます。参禅会広報の役割を果たすＨＰとしつつ、発行回数及びページ数の見直し（縮小）の検討も必要ではないでしょうか。

◆ 柏市　石澤　健

❶龍泉院参禅会五〇年の歩みとして貴重な資料と思います。

❷平成二九年一〇月一五日発刊、六八号に椎名老師の坐禅指導を受けている参禅者の写真の中に小生の姿が。平成三〇年一〇月五日発行、創刊七〇号に初めて拙文「生年月日に坐禅開始」を載せていただいたこと。参加した様々な行事の記事などが記憶に残

る。ここ七・八年の自分史の一つと思う。

❸新人の方に体験記を書いてもらい、三年後、五年後再度体験記をもらってはいかがでしょうか。只管打坐の坐禅でありますが経験による変容に興味を覚えております。

◆ **柏市　杉浦　上太郎**

❶『明珠』は宝箱。とてつもないエネルギーの貯蔵庫。参禅会の歴史と会員諸氏の人生が詰まっている。私にとっても人生録だ。

❷松井隆さんが第六五号に書かれた「参禅会二〇年の回顧」を感銘深く思っている。訪中の際、訪問先の天童寺の典座さんに触発されて、参禅会の典座を決意したこと、平成二一年から、龍泉院様の庭の手れ作務をスタートさせたことが綴られている。

❸『明珠』を更に成長させ、広報誌としての機能発揮を夢見ている。坐禅堂建立の初発心“**広く坐禅を普及**”の原動力となるべし。

◆ **柏市　武田　博志**

❶昭和六〇年五月、最初の参禅会で創刊号と出逢う。一二年経った平成九年春に『明珠』編集担当となり平成一七年春の四二号で、五十嵐さん、松井さん、添田さんへバトンタッチ。思い出深く貴重な八年間でした。ご縁深き『明珠』は、私の半生を励ましてくれた伴走者と言ってもいい存在です。

❷五三号。「良寛と出逢う旅」特集号は、参加者の感慨深い内容が満載です。この中で美川恒子さんが取り上げた椎名老師の最初のご挨拶についての記述は、よくぞ取り上げていただいたという思いです。私の旅の位置付けが明瞭になりました。

❸これまでどおり、大きなイベントの内容と参禅会員の思い、気付きなど個々人の記事が並行して取り上げられていくのがよいと思います。

◆ **柏市　松井　隆**

❶明珠発刊は当参禅会の宝だと思います。中でも編集委員の並々ならぬご努力が今日まで継続し、力が結集された結果だと思います。そして、その都度椎名老師と相談し、参禅の文化を築いてきた賜（記録）だと思います。これからも継続の力を発揮していただけることを期待します。

❷「明珠創刊五〇号記念」に寄稿いただいた佐々木宏幹先生（駒沢大学名誉教授）タイトルは何と【坐禅の力】であります。平成二〇年ごろの参禅会は約三〇名参加し、まるで「龍泉院サンガ（僧伽）」の様だとも、明珠各号を拝読いただき記され、ここ迄至るには椎名御老師のご指導によって力が結集し運営されているとも述べられています。椎名御老師は日頃口宣等で理論より実践だよと諭されて、坐禅と共に会員間のコミュニケーション能力が自然に育まれてきたようにも思います。

❸参禅会員の親睦や団結を図る意味では、国内や中国旅行だと思います。当時の旅の思い出が明珠会報合冊本を見て甦ってきます。最近は旅行がないので参禅会の団結が少し欠けてきているようにも見えます。

◆ **流山市　市川　洋介**

❶明珠は編集側、読者側の両方で関わらせていただきました。特に、編集では岡本さんをはじめとする色々な方々がアドバイスや勧言を下さり、自信をもつきっかけになったと思います。

❷自分が寄稿した記事が印象に残ります。後から読み返すと、もっとよい表現があったのではないか、この解釈はふさわしくないのではないかなどと反省することが多いです。粥飯の熱気というか、同じ文章でもその時々の気分で全く違う見え方がするのだなと思います。

❸龍泉院では正法眼蔵の提唱が毎月行われて

います。それもあるので、各人がこの巻のここが興味深かった、このように受け止めた、などと紹介しあうトピックを設けるのも面白そうです。復習も兼ねて。

◆ 我孫子市　清水　秀男

❶老師や会員の方の玉稿により道心が鼓舞されると共に絆の深まりの場であり、自分の投稿文作成過程を通じての錬成の場である。

❷何と言っても会員相互の念願であった「坐禅堂建立記念」の五九号と「坐禅堂開単式」の六〇号の記事である。

❸会報誌発行の意義として、（一）会の現状・活動記録・運営方針の報告。（二）老師を含めた会員間のコミュニケーション・情報共有・学びとそれらを通じての組織の活性化。（三）外部への発信機能の三つがあげられる。常にそれら意義が十分に発揮されているかチェックし改善していくことが必要である。特に（二）の観点からは投稿者が固定化していることへの対策、（三）の観点からは会員募集のツールとしてHPとの連携も含めて早急な対策が求められる。

◆ 松戸市　河本　健治

❶初心者にとって、初めて手にする「会報誌」は、なんと難しいの一言でした。坐禅に対する思いが深まった頃、何かして参禅会継続の糸口を求め、年二回の発行日を楽しみにしています。

❷〝良寛さんと出逢う旅〟より、親睦を兼ねての仏道探求の旅は、なんとも奥深い内容にてうらやましく拝読しました〝特集〟私と参禅会〟より、総じて人はそれぞれで「良い」を改めて再認識し、思いをめぐっています。

❸龍泉院参禅会は、歩みと共の『明珠』であるがゆえ、今後も粛々として、参禅の継承が望まれます。サンガの〝行〟そのものが、その時々様相を刻む事でしょう。

◆ 東京都板橋区　山本　聡

❶『明珠』編集委員を勤めさせていただいた事がありますが、東堂老師の住職時代『従容録に学ぶ』を編集者として熟読したことは大変勉強になりました。転職、転居の関係で参禅会へ参加することは難しくなってしまいました。異なる環境に飛び込んで世間の冷たい水に浸かってみると自分がわかったつもりになっていたことが多々あることが痛感されます。坐禅体験会で人様に坐禅の作法を説明したことがあった事を思い出すと汗顔の至りです。学ぶべきこと、修行すべきことがまだ山とある事を人生の悦びとして参禅と、『明珠』と関わって学んだ事を燈明してこれからも歩んでいきたいと思います。

❷『従容録に学ぶ』は時に難解ですが時にユーモアも交えてわかりやすく解説されていました。

❸参禅会に出席できていないので回答辞退。

◆ 船橋市　髙間　基治

❶学生期から、身近にそれとなく任じていた『明珠』は、父髙間利介の仕業であった。旧い史料を繰り起しての記事は、エンターテイメント性に欠けて、面白いモノではなかった。だが、哲学科に籍を置く小生には、妙にひっかかる存在であった。

❷何年か前に、希望者を連れて中国の寺巡り。

❸漢文→読み下し文→解説に流れがあれば、なお親しみ易いものとなりましょう。この行状には、もの凄いパワーを感じた。何れにしても、椎名先生の学僧として、沼南地区の宝となるでしょう。

龍泉院は
曹洞宗公認
参禅道場

◆柏市　齊藤　正好

❶正直に言って読むのは楽しみだが、自分が書き手になるのは避けたい。

❷比較的最近に読んだせいか、七八号の市川信彦さんの「龍泉寺と龍泉院」が記憶に鮮明です。こんなご縁もあるのだなと思って読みました。

❸編集委員の活動状況を傍で見ているととても大変そうに思う。書き手、作り手双方の人材が枯渇してきている現状を考えると、発行回数やページ数を減らすなどを考えても良いのではないかと思う。

◆柏市　五十嵐　嗣郎

❶巻頭を飾り当参禅会の気風を伝える「従容録に学ぶ」は、まさに『明珠』の眼睛であり、「従容録に学ぶ」のない『明珠』はありえないと思います。「従容録に学ぶ」は国内で最も『従容録』を分かりやすく解説された文章であり、またその中で、ご老師の人生観や豊富な人生経験も語られています。是非拝読されることを切に望みます。

❷『明珠』四〇号の記念号に、第三代目の編集長の武田さんが企画した「〈対談〉『従容録』に学ぶ」があります。椎名老師と小畑代表との対談という形で、五頁にわたって述べられており、『明珠』初代編集長の小畑代表が椎名老師に、『従容録』を分かりやすく、かみ砕いて載せていただけないか」という要請があって実現したとのこと。誠に有難い限りです。

❸これまで「従容録に学ぶ」は七〇回掲載されましたので、『従容録』百則の内、七〇則がご老師の手で拈提されたことになります。残り三〇則について、今後ご老師のご回復を待って再開されることを切に願います。

◆白井市　中原　悦雄

❶私は在籍が短いので特段の思いは少ないように思います。

❷草木に関する記事に惹かれます。

❸坐禅がしたいので特別に『明珠』に対する思いは少ないように思います。すみません。

◆流山市　市川　信彦

❶浅学の身で恐縮ですが、参禅会の単なる機関誌に留まらず、仏教学の知識深耕に寄与するクオリティの高さがあると思っています。

❷自身最初に掲載（七八号）させて頂いた内容で、複数の方々から読書感や励ましの声をお掛け頂いた点です。

❸ウェブ掲載をメインにして、実紙発行部数を削減する。（ウェブ閲覧中心にして、コスト、環境負荷低減を図る）

明珠はクオリティ高いですがその分、編集委員の皆様への負荷がとても大きいと感じています。内容的にも絞っていくことを検討しても良いかもしれません。

◆松戸市　小畑　節朗

❶『明珠』は、参禅会の歴史そのもの。八〇号まで継続してこられたのは歴代編集者のご苦労の賜です。深く感謝もうしあげます。

❷昭和六〇年（一九八五年）四月の創刊号で、椎名堂頭老師が述べられた巻頭言です。「尽十方世界」。すなわち、あらゆる 世界は絶対真実のすがたであり、われわれにとっては、この与えられた現実を、強く正しく生きぬくのが、佛法の修行である。そして坐禅こそは、この尽十方世界の行そのものであり、尽十方世界を坐断した無心のすがたにほかならない。

❸提案というよりは、お願いであります。次の世代の方々が坐禅修行相続の証として『明珠』を相続してくださることを**切にお願いいたします**。またそれは、参禅会員の乳水和合の証としての『明珠』でありますように。

（本項完）

想うこと

宗教と戦争

柏市　岡本　匡房

宗教は「殺人は悪」とし、隣人を愛し、心に平安をもたらすものとして、人々に深く帰依されてきた。

だが、歴史を紐解いた時、これとは全く真逆な風景も浮かび上がってくる。古来、戦争には宗教が深く関わってきた。「神の名によって戦争の大義は自国にあり」と利用された例は枚挙にいとまがない。神によって救われた人と、神の名によって殺された人とどちらが多かったか、分からないほどだ。

だが、その関わり方は時代が下るとともに大きく変わってきた。

古代エジプト、ギリシャ、ローマは多神教の世界。ここでは「神は戦争を勝たせてくれる存在」だった。戦いに勝てば神の像を作り、それを祭る壮大な神殿が建てられた。

神のための戦争

だが、キリスト教など一神教が力を増すとともに、戦争の大義が変わってきた。戦争は「神のため」に行われ、「神を広げるため」とされた。となると、異教徒は神に反対する存在であり、それは改宗させるか抹殺する存在になった。その財産は略奪してよいとされた。その典型が十字軍であり、スペイン、ポルトガルの中南米征服だった。

だが、一神教が地域を覆うようになると、今度は「異教徒との戦い」ではなく「異端との戦い」になった。それが戦争にもさらに大きな影響を及ぼすようになった。その典型がドイツの地を中心に行われた三〇年戦争である。

ここでは、カソリックとプロテスタントが争い、「神の庭」といわれた美しいドイツは荒廃、何十キロも人跡が見当たらない地域も生まれた。死者は約八百万人。この数は第一次世界大戦が起こるまで最大だったといわれている。

姿消した(?)神のための戦争

その惨禍があまりに大きかったため、ヨーロッパでは三〇年戦争後、「神の名による戦争」はほぼ姿を消した。だが、イスラム教ではスンニ派とシーア派などに分かれ、今も争っている。この争いで何人が亡くなったかは定かではない。

しかもカソリックの中でも分派が出た。ギリシャ正教、ウクライナ正教、ロシア正教など国ごとに分かれ、それぞれが独立した存在になった。

特にロシアでは正教会が前面に出て、プーチンを支持している。「この戦争が正義であり、そこで戦うこと、つまり戦死することとは神の御心にかなう」との、およそ、時代が数百年もさかのぼった感覚が出てきた

戦いを否定した仏教

その中にあって、「戦争は悪」として、反対してきたのが仏教だった。

マガダ国がヴァッジ族を攻めようと考え、釈尊に意見を求めたところ、「ヴァッジ族は間違っているか」など、七つの問いを出し、すべて正しいとして、この戦争は行わないべきとした。また、マガダ国が釈迦族に侮辱されたとしてお釈迦様の祖国を攻めようとしたとき、三度にわたって、その行く手をふさいだ。だが、最後は結局、ふさがらず、釈迦族は滅ぼされた。

日本でも、仏教徒と神道の戦いは起こらなかったし、仏教でも真宗、曹洞宗など宗派の対立は起こらなかった。日蓮宗と浄土宗が争った「安土宗論」はあるが、戦争にはなってい

ない。

宗教が戦争に大義のお墨付きを与えたら、それは宗教の自殺行為ともいえる。ウクライナ戦争では、それが現実に起こっている。これは形を変えた「異端の戦い」ともいえる。宗教が戦いの帰趨を決める決定的要因にはならないにしても、士気には影響する。果たして、それでよいのだろうか。「寛容、慈悲」の仏教の精神を世界が思い起こすべき時ではないだろうか。

「のぞみ」と「ひかり」

我孫子市　清水　秀男

朝日新聞朝刊一面コラムで、哲学者の鷲田清一さんが「折々のことば」と題して古今東西の言葉を紹介し、思索を巡らしている欄があり愛読している。その中で臨床心理学の泰斗であった河合隼雄さんの逸話に基づく「**のぞみはありませんが　ひかりはあります**」という新幹線の駅員さんの言葉を紹介しコメントしているのが印象深かったので全文（令和二・九・十三掲載）を紹介したい。

「千葉・本妙寺の掲示板にあった言葉（江田智昭著『お寺の掲示板』所収）。臨床心理家・河合隼雄が残したジョークから引かれた文言。河合が新幹線の切符を買おうとしたら、駅員にこう言われた。瞬間、この言葉の深い含蓄に感激し、同じ言葉を大声で返すと、駅員は「あっ、『こだま』が帰ってきた」とつぶやいたという。希望をなくしても仏様の光はずっと人を照らしている。」

『お寺の掲示板』を読むと、この言葉の背景が見えてきます。学会で出張していた河合さんが、夜遅い時間の新幹線の切符売場で、駅員に「のぞみはもうありません」と言われて絶句したが、その後に「ひかり」はありますと言われ、「なんと素晴らしい言葉だ」と感激したという。河合さんは、何故駅員の単に事実を述べただけの何気ない言葉を深い含蓄あるものとして感銘を受けたのでしょうか。臨床心理家として悩む患者とも向き合っていた河合さんは、実はその時患者さんから自殺をほのめかす様な切羽詰まった電話を受けていた。自分が駆け付けたからといって何ができるのかと思いながらも、とにかく切符を買おうとした時の会話だった様です。日本文化や仏教等にも幅広い研究を重ねた河合さんは、この言葉に仏教的意味を見出し、まさにその患者への言葉だと受けとめたのではないでしょうか。即ち、**「のぞみはありませんが、ひかりはあります」**という言葉は、**のぞみ（希望）**をなくしても、**仏**の**ひかり（光）**は常に我々を照らし続けている教えで、深い仏教的意味を持つものであると。

この言葉を私なりに味わってみます。

煩悩の**闇**を抱えている私は、その**闇**の中で思い通りにならず右往左往の日暮らしをしている。しかし私を生かし支えている**大いなる存在（仏）**は、智慧と慈悲の**光**でその**闇**を照らし続け、捨てず救い取って下さっている。そして**光**に照らされることによって初めて、本来の自分とは何かに目覚め、今の自分は煩悩まみれで**闇**の只中であったと気づくことができる。闇が深ければ深い程光も強い。この言葉から、幾多の**闇**が続こうが必ず**光**に巡り合うことを信じて生きることの大切さを、養生中の身に痛切に感じています。

「一寸先は闇ではなく光である」（坂村真民）。

このコラムの最後の会話はユーモアで結ばれています。河合さんが駅員の言葉に感激して同じ言葉をこだまの様に繰り返した。そこに新幹線「こだま」が入ってきて、駅員は「こだま」が帰ってきたとつぶやいた。極上の落ちです。

『明珠』八〇号発刊に想う

柏市　山川　進

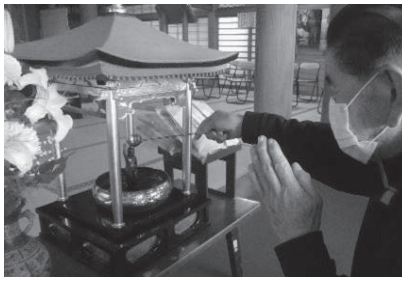
龍泉院の参禅会に参加していた頃の『明珠』のバックナンバーを読み返してみる。手許にある会報は一〇冊程で多くはない。この中の第六九号（平成三〇年四月八日発行）に私の投稿記事がある。題目は「おじさん達の弔い」である。当時の山谷地区についてのものである。社会的問題となっていた少子高齢化問題である。今年後期高齢者の年齢を迎えた年金暮らしの身にとっては、益々身近な問題となりつつあるテーマであるが、当時に比べ一歩も解決に向けて動いている様子はなく、むしろ事態はより深刻になっているような気がする。年を刻む中で、毎朝一番に行っていることは、短い時間ではあるが坐ることであり、ここから私の一日が始まる。これからも続けていくつもりである。

山内動静

報恩感謝の「降誕会」円成す

去る四月八日午後二時から、龍泉院本堂において行われました。参加者は一六名でした。

今年の「降誕会」は〝コロナ禍〟が小休止状態を迎えた好日に行うことができました。



「降誕会」は、釈尊の誕生日を祝して行われる仏教界の一大行事です。当日は灌仏盤の中に安置された釈尊立像に参加者が厳粛な思いで甘茶をお灌ぎしました。

「降誕会」配役は、導師の明石住職様の他、殿鐘・河本、送迎・佐藤、侍者・松井、侍香・山桐、副堂・五十嵐、維那・杉浦の六名。

明石導師の釈尊誕生を奉祝する法語が述べられた後、全員で般若心経をお唱えしました。法要終了後、明石導師より「逆境をプラスに変える」と題した法話を拝聴しました。

ワーキンググループ報告

WG 委員　佐藤　修平

既報（明珠七九号）の通り、WGは二月から毎月会議を重ね、七月二三日の第六回会合では、小畑代表幹事の参加を仰ぎ、「提言」原案の説明と、内容への賛同を頂いた。

八月定例会後に、旧記念行事実行委の一四名のメンバーとの拡大会議で「提言」の承諾を得る予定である。（今号発行時には終結済）「提言」の骨子は、

（一）「只管打坐」を本旨としイベントは控える

（二）小畑代表幹事を最後とし、次代は代表幹事を置かず、数名の運営委員会の合議による

（三）運営は住職と相談しその意思を尊重

行事　起案・新たな費用や予算超過は事前相談・合意を得る

（四）収支均衡、大口喜捨に頼らぬ

（五）会計の開示と透明性の確保

（六）期首に概算予算を組む

他に、今後の検討課題として挙げられたのは、

（一）運営委員会の構成

（二）明珠の今後、合冊の必要性

（三）会員増加策

委員は、岡本、小畑（二）、齋藤、中原、吉澤、佐藤の六名。明石住職は第三回会議より参加されている。

（七月二六日記）

龍泉院様施食会厳修さる

＝椎名東堂老師も出席＝

去る八月一六日、恒例の施食会が明石導師のもと、五名の僧侶の随喜を得行われました。

参禅会からは一三名が参加。皆一様に〝我為すことを為さん〟と働く姿は頼もしいかぎりでした。

一月下旬以来長らく治療生活を続けられてこられた椎名老師がご出席されたので、多くの会員が老師のもとに集まり再会を喜び合いました。

総勢約一〇〇名の施食会大円成にて終了す。

龍泉院参禅会の広報について

柏市　五十嵐　嗣郎

龍泉院参禅会の広報誌関連としては『明珠』『口宣』『龍泉院ＨＰ』の三つがあげられます。

『明珠』は昭和四六年に発刊され、毎年二回の発行で今年で八〇号を迎えます。『口宣』は平成一一年に発行され、これまでに二三号が刊行されました。『龍泉院ＨＰ』は平成二〇年五月にスタートしました。一時、セキュリティの脆弱性から休止していましたが、ウィルス対策を施して令和三年一〇月から再開いたしました。

『龍泉院ＨＰ』には、龍泉院に関する紹介記事と参禅会に関する記事に大別されます。参禅会については、「椎名老師挨拶」、「小畑代表挨拶」、「参禅会紹介」、「参禅会年間行事予定」、参禅会へのお問合せ」、「参禅会だより」、「口宣pdf」、「口宣音声」、「明珠 pdf」から構成されています。因みに『明珠』の基本的構成は、「従容録に学ぶ」、「各種行事に関する報告・感想」、「各種委員会の活動報告」、「会員からの仏教に関する意見」となっています。

『龍泉院ＨＰ』を機能面から分けてみると、〈新しい情報発信機能〉と〈ドキュメント保存機能〉に大別されます。〈新しい情報発信機能〉は主に「参禅会だより」に掲載されています。

・毎月の定例参禅会報告（ご提唱された『正法眼蔵』の巻の所感と参禅会員へのお知らせ）

・各種行事に関する報告

・各種委員会の活動報告

です。

一方〈ドキュメント保存機能〉については、「明珠 pdf」と「口宣 pdf」と「口宣音声」がドキュメントファイルに保存されています。

まず「明珠 pdf」には、『明珠』第一号から七九号までが pdf ファイルとして保存されています。この度、杉浦さんが『明珠』八〇号の付録として、『明珠』第一号から八〇号までの記事索引を作成してくださいました。この索引を活用することにより、読みたい記事を「明珠 pdf」から楽に弾き出すことができるようになりました。有難いことです。

次に「口宣 pdf」には『口宣』第一号から二三号までが pdf ファイルとして保存されています。「口宣音声」には令和三年一〇月より、椎名老師及び明石住職の坐禅堂での口宣を録音した音声ファイルが保存されています。ご自宅で坐禅をしながら、口宣を再生することにより、坐禅堂での緊張感を再生することもできます。

今後はＳＮＳ的な機能を付加したり『龍泉院ＨＰ』を拡充して参りたいと考えております。皆さまのご協力をお願いいたします。

＝椎名老師による『正法眼蔵』提唱が惜しまれつつ終了＝

44年余の長きにわたり、延べ65巻ものご提唱を賜ってきた『正法眼蔵』ですが、令和5年1月の定例参禅会において最後となりました。椎名老師には心から感謝申し上げ、必ずや“仏道精進”の礎とさせていただくことをお誓いいたします。

幸いにも、2月の定例参禅会からは、現住職の明石直之師が『正法眼蔵』のご指導を継承くださり、まことに有難いことです。よろしくお願い申し上げます。

椎名宏雄老師『正法眼蔵』提唱記録（自：1979年1月～至：2023年１月）

No.	巻　名	開　始	修　了	No.	巻　名	開　始	修　了
1	辨道話	昭54年1月	昭56年2月	34	三昧王三昧	平17年4月	平17年6月
2	現成公案	昭56年3月	昭56年12月	35	全機	平17年6月4・5日（接心）	
3	生死	昭57年1月	昭57年5月	36	魔訶般若波羅蜜	平17年7月	平17年9月
4	道心	昭57年6月	昭57年11月	37	柏樹子	平17年10月	平18年2月
5	佛性	昭57年12月	昭60年3月	38	礼拝得髓	平18年3月	平18年12月
6	一顆明珠	昭60年4月	昭60年11月	39	三昧王三昧	平19年1月	平19年3月
7	坐禅箴	昭60年12月	昭62年1月	40	大悟	平19年4月	平19年8月
8	山水経	昭62年2月	昭63年2月	41	都機	平19年9月	平19年12月
9	心不可得（前）	昭63年3月	昭63年7月	42	春秋	平20年1月	平20年5月
10	発菩提心	昭63年8月	平元年6月	43	嗣書	平20年6月	平21年1月
11	身心学道	平元年7月	平2年4月	44	帰依三宝	平21年2月	平21年11月
12	有時	平2年5月	平2年11月	45	道得	平21年2月	平22年4月
13	菩提薩埵四攝法	平2年12月	平3年6月	46	佛向上事	平22年5月	平22年11月
14	観音	平3年7月	平3年12月	47	龍吟	平22年12月	平23年1月
15	諸悪莫作	平4年1月	平4年8月	48	光明	平23年2月	平23年6月
16	古佛心	平4年9月	平4年12月	49	優曇華	平23年7月	平23年8月
17	即身是佛	平5年1月	平5年6月	50	受戒	平23年9月	平23年11月
18	無常説法	平5年7月	平6年6月	51	大修行	平23年12月	平24年7月
19	古鏡	平6年7月	平7年12月	52	祖師西来意	平24年8月	平24年9月
20	坐禅儀	平8年1月	平8年3月	53	行佛威儀	平24年10月	平26年1月
21	谿声山色	平8年4月	平9年2月	54	佛道	平26年2月	平26年12月
22	恁麼	平9年3月	平9年10月	55	梅華	平27年1月	平27年8月
23	発無上心	平9年11月	～10年6月	56	法性	平27年9月	平27年12月
24	見佛	平9年7月	平11年4月	57	自證三昧	平28年1月	平28年10月
25	三時業	平11年5月	平11年9月	58	看經	平28年11月	平29年7月
26	唯佛与佛	平11年10月	平12年3月	59	心不可得（後）	平29年8月	平30年3月
27	三界唯心	平12年4月	平12年7月	60	佛經	平30年4月	平31年1月
28	脱心説性	平12年8月	平12年12月	61	海印三昧	平31年2月	平31年9月
29	行持（上）	平13年1月	平14年6月	62	空華	令元年10月	令2年7月
30	行持（下）	平14年7月	平15年12月	63	光明	令2年8月	令2年12月
31	重雲堂式	平15年6月5・6日（接心）		64	春秋	令3年12月	令4年6月
32	諸悪莫作	平16年1月	平16年6月	65	阿羅漢	令4年7月	令4年10月
33	諸法實相	平16年7月	平17年3月	66	徧參	令4年11月	令5年1月

※1 略語／昭：昭和・平：平成・令：令和
※2 コロナ禍のため月例参禅会休止（11回）：令2年4・5月、令3年1月～9月
※3 令和5年2月より、新住職の明石直之師に継承された。

『正法眼蔵』全巻対比「椎名老師」提唱の足跡

椎名老師が、長年ご提唱され続けられた『正法眼蔵』は、全 95 巻中 61 巻（延べでは 65 巻）を終え、膨大な積み重ねとなりました。

このゆるぎない老師のお姿こそ、我々の弁道精進の基本としたいものです。

『正法眼蔵』全巻名及び椎名宏雄老師提唱記録（自：1979年1月～至：2023年１月）

No.	巻　名	既提唱済	開　始	修　了
1	辨道話	○	昭54年1月	昭56年2月
2	魔訶般若波羅蜜	○	平17年7月	平17年9月
3	現成公案	○	昭56年3月	昭56年12月
4	一顆明珠	○	昭60年4月	昭60年11月
5	重雲堂式	○	平15年6月5・6日（接心）	
6	即身是佛	○	平5年1月	平5年6月
7	洗浄			
8	礼拝得髄	○	平18年3月	平18年12月
9	谿声山色	○	平8年4月	平9年2月
10	諸悪莫作	○	平4年1月 平16年1月	平4年8月 平16年6月
11	有時	○	平2年5月	平2年11月
12	袈裟功徳			
13	傳衣			
14	山水経	○	昭62年2月	昭63年2月
15	佛祖			
16	嗣書	○	平20年6月	平21年1月
17	法華転法華			
18	心不可得（前）	○	昭63年3月	昭63年7月
19	心不可得（後）	○	平29年8月	平30年3月
20	古鏡	○	平6年7月	平7年12月
21	看經	○	平28年11月	平29年7月
22	佛性	○	昭57年12月	昭60年3月
23	行佛威儀	○	平24年10月	平26年1月
24	佛教			
25	神通			
26	大悟	○	平19年4月	平19年8月
27	坐禅箴	○	昭60年12月	昭62年1月
28	佛向上事	○	平22年5月	平22年11月
29	恁麽	○	平9年3月	平9年10月
30	行持（上） 行持（下）	○	平13年1月 平14年7月	平14年6月 平15年12月
31	海印三昧	○	平31年2月	平31年9月
32	授記			
33	観音	○	平3年7月	平3年12月
34	阿羅漢	○	令4年7月	令4年10月
35	柏樹子	○	平17年10月	平18年2月
36	光明	○	平23年2月 令2年8月	平23年6月 令2年12月
37	身心学道	○	平元年7月	平2年4月
38	夢中説夢			
39	道得	○	平21年2月	平22年4月
40	画餅			
41	全機	○	平17年6月4・5日（接心）	
42	都機	○	平19年9月	平19年12月
43	空華	○	令元年10月	令2年7月
44	古佛心	○	平4年9月	平4年12月
45	菩提薩埵四攝法	○	平2年12月	平3年6月
46	葛藤			
47	三界唯心	○	平12年4月	平12年7月
48	脱心説性	○	平12年8月	平12年12月
49	佛道	○	平26年2月	平26年12月
50	諸法實相	○	平16年7月	平17年3月
51	密語			
52	佛經	○	平30年4月	平31年1月
53	無常説法	○	平5年7月	平6年6月
54	法性	○	平27年9月	平27年12月
55	陀羅尼			
56	洗面			
57	面授			
58	坐禅儀	○	平8年1月	平8年3月
59	梅華	○	平27年1月	平27年8月
60	十方			
61	見佛	○	平9年7月	平11年4月
62	徧參	○	令4年11月	令5年1月
63	眼睛			
64	家常			
65	龍吟	○	平22年12月	平23年1月
66	春秋	○	平20年1月 令3年12月	平20年5月 令4年6月
67	祖師西来意	○	平24年8月	平24年9月
68	優曇華	○	平23年7月	平23年8月
69	発無上心	○	平9年11月	平10年6月
70	発菩提心	○	昭63年8月	平元年6月
71	如来全身			
72	三昧王三昧	○	平17年4月 平19年1月	平17年6月 平19年3月
73	三十七品菩提分法			
74	轉法輪			
75	自證三昧	○	平28年1月	平28年10月
76	大修行	○	平23年12月	平24年7月
77	虚空			
78	鉢盂			
79	安居			
80	他心通			
81	王索仙陀婆			
82	示庫院文			
83	出家			
84	三時業	○	平11年5月	平11年9月
85	四馬			
86	出家功徳			
87	供養諸佛			
88	帰依三宝	○	平21年2月	平21年11月
89	深信因果			
90	四禅比丘			
91	唯佛与佛	○	平11年10月	平12年3月
92	生死	○	昭57年1月	昭57年5月
93	道心	○	昭57年6月	昭57年11月
94	受戒	○	平23年9月	平23年11月
95	八大人覚			

※ 略語／昭：昭和・平：平成・令：令和

沼南雑記

龍泉院参禅会簡介（コロナ感染症等による変更あり）

【参　禅】

一、定例参禅会

・日　時　毎月第四日曜九時（初参加は八時半）来山、正午解散

・坐　禅　口宣、坐禅、経行、坐禅の順

（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）

・提唱　木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

・座　談　自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日　時　毎月第一日曜日と第二土曜日

・坐　禅　九時から一〇時半まで（入堂九時まで、退堂自由）

※会費なし、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心　本年は六月四日、四炷の坐禅と提唱等

一、成道会　本年は一二月三日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事　涅槃会（二月一五日）、降誕会（四月八日）、施食会（八月一六日）、歳末助け合い托鉢（一二月一〇日）、団体参禅受け入れ、歳末煤払い（一二月定例参禅会後）毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

一、作　務

【会報誌】

一、『明珠』　年二回発行（①四月八日・②一〇月五日発行）

一、『口宣』　年一回発行

〔ウエブサイト　http://www.ryusenin.org/〕『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

【定例参禅会・年間行事】

（　）内は座談の司会者

＊氏名は敬称略

令和五年

●三月二六日　一九名（佐藤　修平）

●四月八日　一六名

―降誕会―

●四月二三日　二一名（佐藤　修平）

●五月二三日　一五名（佐藤　修平）

●六月四日　一六名

―一日接心―

幹事（小畑　節朗）（佐藤　修平）（齊藤　正好）

●六月二五日　一九名（佐藤　修平）

●七月二四日　二一名

●八月一六日　一三名

―施食会大法要作務―

●八月二七日　一八名（佐藤　修平）

【自由参禅】

三月五日(八名)・一一日(七名)

四月二日(一〇名)・八日(六名)

五月七日(六名)・一三日(一〇名)

六月一一日(一二名)

七月二日(六名)・八日(一一名)

八月六月(一二名)・一二日(一〇名)

【奉仕作務】

三月三日(一〇名)・一七日(一〇名)

四月七日(九名)・二一日(八名)

五月一九日(九名)

六月一六日(八名)

七月七日(七名)・二一日(一〇名)

八月四日(四名)・一八日(八名)

【令和五年幹事】

年番幹事　佐藤　修平

会計担当　岡本　匡房

隔月幹事

一～二月　山桐　照夫

三～四月　小林　裕次

五～六月　齋藤　正好

七～八月　石澤　健

九～一〇月　吉澤　誠

一一～一二月　河本　健治

【編集後記】

▼五月八日に新型コロナウィルスの対策規制が解除され、様々なイベントや行事が再開されましたが、ウィルスが完全に無くなった訳ではない。

・小生、五月末にウィルスに感染した。

・基本的な感染症予防を怠らないようにしなければと自戒しています。（秀嗣）

▼明珠の編集委員を続けさせていただくことになりました。

・極めて微力ですが、杉浦さん、五十嵐さん両氏の御指導のもと、頑張っていきたいと思います。

・活動内容を検討するワーキンググループにも参加しております。

・参禅会の将来を案じる気持ちは皆様同じだと思います。良い方向へ進むことを願っております。（吉澤）

▼二六年ぶりに本誌編集委員に再登場。

・『明珠』創刊の二か月前に入門したので、勝手に『明珠』の申し子だと思う。

・今八〇記念号は、椎名老師のご指導の足跡と投稿された方々の人生が、そして明石住職様への期待感が見える。

・智源寺髙橋老師より修行の要諦と励ましを賜った。努々ムダにすまいぞ。

・本誌が坐禅普及力になれば本望なり。

・別冊「目録・索引」の活用を切に願う。

・仲よきは美しきかな＝直哉（宏済）

「坐禅」体験のおすすめ

～「椅子坐禅」もできます～

ときに、本物の坐禅堂に坐り、自己とじっくり向き合ってみてはいかがでしょうか。
坐禅の作法等は、ご指導いたします。

・坐禅体験の申し込み
ホームページ〔http://www.ryusenin.org/〕
電話（広報担当・五十嵐）080-6571-4154

・体験日:巻末頁の「簡介」に記載の定例参禅会か自由参禅のどちらかでどうぞ。

龍泉院参禅会

龍泉院　参禅会会報　創刊八〇号記念

●発行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04（7191）1609

●印刷／港北メディアサービス株式会社　渋谷区渋谷2―7―7　☎03（6803）8470